

弘前大学

学園だより



絵:「家族」制作/教育学部学生 中村 文香

I 特集 東日本大震災に対する支援活動について	
弘前大学の取り組み	2
被ばく医療総合研究所の取り組み	3
学生ボランティア活動	6
II 総合文化祭報告	14
III 第7回 弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト	16
IV 学生生活実態調査について	19
V 留学生だより	22
VI 施設紹介	
北日本新エネルギー研究所	24
教育学部附属小学校	28
VII 新任教員自己紹介	29
VIII けいじばんコーナー	29
IX 編集後記	30

特集

東日本大震災に対する 支援活動について

弘前大学の取り組み

平成23年（2011年）3月11日（金）14時46分、宮城県沖を震源とした日本観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した地震が発生しました。地震直後に10mを超える津波が東北地区の太平洋岸を襲い、多くの人命や財産が失われました。また、東京電力福島第一原子力発電所では停電により原子炉の冷却機能が停止、大量の放射性物質が放出されたために周辺の住民は住み慣れた町から避難を強いられることになりました。

弘前大学では、地震発生直後からDMA T派遣などの被災地支援、授業料免除などの被災学生への支援など、大学全体で今回の東日本大震災への取り組みを行ってきました。

被災地への支援活動

- 原子力災害現地対策本部、Jビレッジなどへの派遣（派遣期間：4日間～5日間）
 - ・活動内容：Jビレッジ等における医療チームの総括、複数被ばく者や傷病者対応の指導・助言等。
 - ・派遣期間：3月15日～4月18日
 - ・派遣人員：3チーム 延べ 23名
- 災害派遣医療チームDMA T（岩手県立二戸病院、同宮古病院）（派遣期間：3日間、2日間）
 - ・活動内容：災害発生直後から被災地での急性期（おおむね48時間以内）医療活動。
 - ・派遣期間：3月11日～3月15日
 - ・派遣人員：2チーム 延べ 23名
- 医療支援チーム（宮城県石巻赤十字病院）（派遣期間：1次隊5日間、以降4日間）
 - ・活動内容：石巻赤十字病院を拠点として「石巻圏合同救護チーム」が組織され、各避難所で巡回診療。
 - ・派遣期間：3月25日～4月22日
 - ・派遣人員：9チーム 延べ185名
- 被ばく状況調査チーム（派遣期間：4日間～5日間）
 - ・活動内容：各避難施設等を回り、被災者及び住民に対して放射線サーベイ等実施。
 - ・派遣期間：3月15日～7月29日
 - ・派遣人員：20チーム 延べ365名
- 一時立ち入りプロジェクト（派遣期間：4日間）
 - ・活動内容：一時帰宅者への放射線サーベイと健康管理及び中継基地の医療面での統括。
 - ・派遣期間：5月25日～8月1日
 - ・派遣人員：11チーム 延べ202名

学生への支援活動

- 被災学生に対する経済支援
被災学生を対象とした入学金・授業料免除を通常の免除枠とは別に設け、入学金16名、授業料70名分の免除を実施しました。
また、生活支援費として入学者には20万円、在学者には15万円を一時金で支給することとし、入学者11名、在学者48名がこれを受給しました。
- ボランティア活動への支援
本学学生の被災地でのボランティア活動を支援するため、活動費の一部を助成しました。1団体あたり原則5万円を上限に活動に必要な消耗品費やバス代金などの移動費等を助成の対象とし、10月末までに5団体が支援を受けて活動をしました。
- 受験生への支援
地震発生日の翌日が後期日程の試験日であったため、遠方から来た受験生は交通手段がなくなり帰宅困難となりました。この帰宅困難者の対応に、人文学部教員をはじめとした有志職員が弘大生協や弘前市と連携協力し、宿泊施設や交通チケットの手配、カウンセラーの配置、関係各所との連絡などを行いました。また、弘前大学文京荘を宿泊先として無料提供し、食事や当座の生活を心配なく過ごせるよう大学全体でバックアップしました。



被災地でボランティア活動を行った
理工学研究科飯倉・齊藤研究室の学生

被ばく医療総合研究所の取り組み

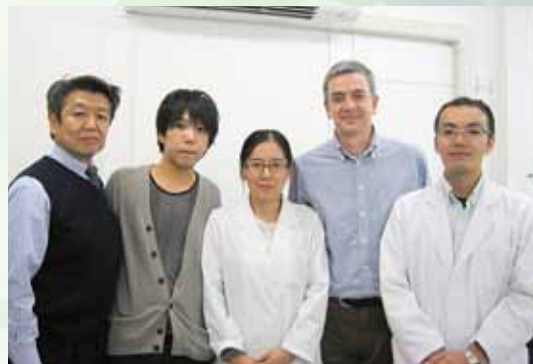
被ばく医療総合研究所長
佐藤 敬



現在の被ばく医療総合研究所は平成21年3月に設置された被ばく医療教育研究施設を前身として、平成22年10月にスタートしました。本研究所は放射線生物学部門、放射線物理学部門、放射線化学部門と、兼任部門である被ばく医療学部門、そして事務室からなり、各部門の専任教員として教授と助教1名ずつ、計6名と、兼任部門の教員1名により、放射線被ばくに関する基礎的な研究活動を中心に活動しています。研究所の発足に際しては、被ばくに関する核種の同定と線量把握、被ばくの生物学的影響、被ばく医療に伴う特殊検査などが主要なテーマとして想定されました。現在はまだ研究所固有のスペースはなく、医学研究科、保健学研究科をはじめ、本町地区の複数の場所で仕事をしています。このことは、さまざまな連携・協力の面で大きなメリットがあるのも事実で

すが、やはり近い将来には、研究所としてまとまったスペースを持って活動できればというのが当面の願いです。

青森県には原子力関連施設が多数存在しており、本学においては、学長のリーダーシップの下、万が一の被ばく事故に備えて、地域住民の安心・安全を確保するため、被ばく医療に対応した体制整備を行ってきました。被ばく医療や放射線事故に関して、組織としての基本的対応を決定する放射線安全機構の設置や、医学部附属病院高度救命救急センターを中心とした実際の被ばく医療実施体制整備と、保健学研究科を中心にした被ばく医療のための幅広い人材育成プロジェクトに加えて、被ばく医療の基盤となる放射線に関する生物学的・物理学的・化学的研究を実施する施設が必要との判断に基づいて、学内措置により本研究所がスタートしたものです。平成23年1月には、すべて学外から招へいされた専任の教授3名が揃い、本格的、総合的な研究活動を開始したところでしたが、そのような中、3月11日を迎えたのでした。



韓国からの客員研究員（中央）を交えての放射線生物学部門研究室一同

弘前大学としては、震災後、直ちに学長を委員長とする放射線安全機構の会議を開催し、さまざまな対応を検討しましたが、福島第一原発事故に関しても可能な限りの協力・支援を実施することとしました。被ばく医療総合研究所の床次眞司教授は、医学部附属病院高度救命救急センターの浅利靖センター長とともに、事故直後から原子力災害対策本部での任務に当りました。その後、医学研究科、保健学研究科、医学部附属病院の教職員や事務職員と共に、本研究所の教員もチームを組んで交代で被災地に赴き、住民の被ばく状況調査や「一時立ち入りプロジェクト」の支援を実施してきました。これらの活動の中で、現地の空間線量率について調査した結果が「Nature」の姉妹誌である「Scientific Reports」に論文として掲載され、Nature Asia-Pacificのホームページでも紹介されたことから、全国的にも注目され新聞等でも報道されました。また、4月1日には、いち早くメディカル・コミュニケーション・センターにおいて、本研究所の主催による市民公開講座「放射線を考える」を開催し、一般の方々への啓蒙活動も行いました。こ

I 特集 東日本大震災に対する支援活動について



平成23年4月1日開催 市民公開講座「放射線を考える」

の講座には県内各地から150名近い参加者があり、立ち見も出る盛況ぶりです。本研究所としても開催した甲斐があったと思っています。

本研究所の役割としては、研究ばかりでなく教育や人材育成においても大きな役割を果たしています。上記の市民公開講座のようなものをはじめ、いろいろな講演会に講師として招聘されることが最近は特に多くなっています。また、以前から保健学科における学部教育の一部を担当してきましたが、将来的にはなんらかの形で大学院教育にも積極的な役割を果たすことを希望しています。さらに、文部科学省特別経費の支援により保健学研究科が中心になって進めている「緊急被ばく医療支援人材育成及び体制の整備」プロジェクトや、同様に、文部科学省科学技術戦略推進費の助成を受けて、医学研究科、保健学研究科、附属病院との連携の下に実施している「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」においても積極的な役割を果たしてきました。また、海外の関連機関とも連携して人材育成にあたっており、韓国の研究者を研修に受け入れています。

研究所の教員をはじめ何人かの研究者が、福島第一原発事故の直後から、調査チームの一員として被災地に赴いた際に、住民の方々の依頼に応じて、環境の放射能汚染状況を調査してきました。このような活動は、これまでの教育・研究成果を社会に還元する取り組みの一環であると同時に、科学的データを後世に残すためにも重要と考えられます。これらの事業を、組織的かつ包括的に、また、被災地住民との共通理解の下に実施するため、



「被ばく状況調査チーム」の活動の様子

以前から一部の住民と協力関係のあった福島県浪江町と弘前大学との間で協定を結ぶことになりました。9月29日に浪江町役場の避難先である二本松市内の福島県男女共生センターにおいて、馬場有 浪江町長と遠藤正彦 弘前大学長による協定締結式が行われました。締結式には、本学から財務・施設担当理事、農学生命科学部長、北日本新エネルギー研究所長、白神自然環境研究所副所長、床次教授と私自身も出席しましたが、全学的な、そして包括的な取り組みであるという姿勢が理解されたと思っています。これを受けて、環境汚染が比較的高度で、多くの住民が町外に避難している浪江町において、実態の把握や環境の改善と大震災からの復旧・復興を目

指した研究・支援活動を本格的に実施することとなりました。これは弘前大学を挙げての取組になりますが、被ばく医療総合研究所としても、他学部、他研究所のみならず、学外機関とも連携、協力の下、積極的役割を果たしていきたいと考えているところです。具体的に何をすべきか、そして何ができるかは、今後、浪江町の住民の方々との間で詰めていくことになると思います。いずれにしても、短時間で終了するようなことではないと予測されますが、本研究所としても使命感を持って取り組むつもりです。

当然のことながら、今回のような原発事故を以前から予測した訳ではありませんが、地域の安心・安全のために取り組んできたことが、図らずも現実にかされることになりました。それに関しては、遠藤学長の卓越した先見性とリーダーシップに敬意を表するとともに、今後も無いとは言い切れない被ばく事故に備えた教育、研究に力を入れていくこと、そして被ばく医療総合研究所における教育、研究の成果を挙げていくことが重要と考えています。

万が一、放射線被ばく事故が発生した場合に、医療の実施体制としては、あらゆる職種の専門家が放射線に関する知識を持って適切に対応することが求められます。加えて、医療のみならず、行政をはじめとして社会全体で適切な対応をとらなければならないことは、今回の震災によっても明確になったところです。弘前大学被ばく医療総合研究所は、被ばく医療の基盤を想定した、生物学・物理学・化学的研究を目的に設置されたものですが、それらにとどまらず、多くの専門家等と連携、協力して、地域全体における安心・安全の確保に貢献するとともに、人材育成や研究成果の発信によって、世界の被ばく医療体制整備にも寄与することで、弘前大学における教育、研究と社会貢献の一翼を力強く担っていきたいと思います。



福島県浪江町での空間放射線量率走行サーベイ



医学研究科・保健学研究科との共同事業
「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」セミナー



高速道路SAにおける空間放射線量率測定

学生ボランティア活動

弘前大学人文学部ボランティアセンター事務局 平野 潔 (人文学部)

1 これまでの活動

2011年3月11日に起きた東日本大震災の直後に設立された「弘前大学人文学部ボランティアセンター(HUVC)」は、4月から岩手県九戸郡野田村への支援・交流活動を続けてきました(設立の経緯等に関しては、『学園だより』171号22-25頁を参照してください)。

HUVCの具体的な活動の経緯は、「弘前大学人文学部ボランティアセンターの歩み」を見ていただきたいと思います(ここでは、ガレキ撤去などの活動を「支援活動」、各種イベントへの参加などの活動を「交流活動」と表記しています。実際には、両者は一体の活動で明確に分けることが出来ませんが、便宜上、そのように表記します)。被災地でのボランティア活動というと、ガレキ撤去などの活動が真っ先に思い浮かびますが、HUVCの活動はそれに止まりません。今回は、野田村における学生ボランティアの様々な活動をご紹介しますと思います。まず、学生の声として、各種の活動に参加した学生の皆さんに、その内容を紹介してもらいながら、感想を聞いてみたいと思います。次に、学生の活動を様々な面からサポートしてくださった方々の目に学生ボランティアの活動がどのように映ったのかを、お話ししていただきました。そして、最後に、HUVCの事務局担当者の方に今後の活動についてお聞きしました。

2 学生ボランティアの多様な活動

まず、学生ボランティアに参加した皆さんから、これまでの活動内容の紹介とともに、活動に参加した感想を聞きたいと思います。

最初に、震災から10日後に現地入りし、その後も継続的に活動を続けている三上真史君に、震災直後の様子を中心に語ってもらいました。

野田村に行かずにはいられなかった

北海道教育大学人間地域科学課程地域創生専攻 三上 真史

私は弘前と野田村との支援交流の当初から関わっており、震災後、弘前から野田村へ初めて行ったなかの一人である。

われわれが初めて行ったのは3月25日。山下祐介准教授(現・首都大学東京准教授)とエコ遊の土岐氏、NPOフードバンクだいちらと共に、まずは実際に行って状況を把握し、救援物資を届けるためだった。

青森は今年、新幹線開業と弘前城築城400年の記念の年で、大々的に観光をアピールする取り組みをしていた矢先での震災だった。今回の震災の影響で、観光のキャンセルが相次ぎ、打撃を受けていた。「絶対に自分たちにも関わってくる問題だ。すぐお隣の県を助けにいかないわけがない。」と思う一方で、「自分みたいな力のない若者が行っても、役に立つのか。かえって迷惑ではないか。」と不安もあった。

初めて避難所で物資を配ろうとすると、あきらかに疲れている様子なのに、私たちには笑顔で、「何とかやっている。もっと困っている人にまわして。」と断られてしまった。知らない人にとっさに断ってしまうのは、人と人との関わりと同じことだと思った。差し入れを渡す感覚で渡すととても喜んでくれた。震災直後の野田村は、視界の端から端までが流された家とがれきの光景で、重い空気が漂っていた。フレームの中で見るテレビと全然違った。野田村の惨状を目にし、行くかどうか迷っている場合ではなかった。行ってみるとすることはいくらでもあった。得意なこともあった。迷ってるならまず、行った方が良い。その後も行かずにはいられなかった。顔を見せるだけでも、話し相手になっただけでも、とても喜んでくれた。大げさなことはしなくても良い、たくさん的人数よりも、何度も行くことが大切だと実感した。ボラン

ティアは行くな。自粛しろ。という話もあったが、全くそんなことはなかった。被災地だからといって特別気をつけることはなく、普通の日常生活で人としてやってはいけないことを、さらに気をつけるだけだ。

弘前でこれほど速やかに行動できたのは、市民の有志として突撃で行ったことと、弘前市、弘前大学と共に連携し、協力し合えたからこそである。市民と行政と大学。前例のない新たなパートナーシップの試みは、そのどれかが欠けていれば絶対にできなかった。

野田村の方々にはボランティアに慣れておらず、構えてしまうように感じるが、横文字のボランティアはそうでも、「助け合い」なら普段からしっかりできている村だ。

野田村を離れて暮らしている子どもの親へのサポートもしっかりと見られる。

私は人口減少や少子高齢化が進む中、地方都市やムラが、たとえ人口が少なくなっても、年をとるまでいきいきと暮らせるような地域社会にしていけるためにはどうしたら良いか学んでいる。コンパクトにまとまって豊かなクラシをしている野田村を、私は人口減少型社会の先進事例として学びたい。私は野田村での活動を通して、お互い助け合うこと、様々な人たちと行動を共にし関わって行くことの楽しさ、大切さに気づいた。

ボランティアで出会った弘前・八戸のみなさんと野田村の方々に感謝している。



大きなガレキを力を合わせて (2011.7.16)



最後のガレキ撤去作業 (2011.8.31)

その後、HUVVCの活動が実質的にスタートしますが、4月から8月までの4ヶ月間、その活動の中心となったのは、ガレキの撤去活動でした。その様子を、何度も野田村に通い、ガレキ撤去に関わってきた目黒杏奈さんに話してもらいます。

人の力

理工学部地球環境学科4年 目黒 杏奈



集められたガレキの山 (2011.8.10)

野田村を初めて訪れた日のことが、私の中で一番心に残り、今でも活動を続けている理由になっています。

初めて訪れた日、土の中から瓦礫を手で拾う作業がありました。写真・おもちゃ・手紙・本・Yシャツ・使いかけの調味料…人々の「暮らし」があったことを示すものばかりが出てきました。普段と何も変わらない、当たり前前に送っていた毎日は、あの日一瞬にして奪われてしまったのだと、今は何もないあの場所から感じとりました。そして人間1人の非力さを痛感しました。作業しても変わらない光景。自分のしていることに意味はあるのか、復興の一部となり得ているのか…そう思っていました。

その後あるおばあさん宅での作業がありました。先ほど同様作業が終わっても残る瓦礫の山々。傍から見れば全く片付いていません。やはり自分のしていることに意味はないと思いました。しかしおばあさんは1人1人に頭を下げ、笑顔で「ありがとう」と言い続けていました。その笑顔が印象的でした。「辛い状況の中での、あの温かみのある笑顔。それが私達のほんの小さな力で生み出せた。」そのことが嬉しかったです。もしかしたらさっき拾った写真・おもちゃたちは誰かの大切なものかもしれない。それが持ち主に戻ったならば、また笑顔が生まれるかもしれない。私達の小さな力が誰かの笑顔を生み出すのかもしれない。そう思い、今でも野田村を訪れています。

別の日に、あるお宅で膨大な量の瓦礫撤去作業がありました。津波が運んできたと思うと「自然の力はすごいな…」と感じながら作業を行いました。なんとかその日中に片づけることができ、ホッとしていると家主さんが「人の力はすごいね。」と私の耳元で仰いました。

たとえ非力でも微力でも無力だとしても、誰かの笑顔を生み出していけるのは「人の力」なのだと思います。いつの日か普段と何も変わらない、当たり前前に送っていた毎日を「人の力」で作ってあげたいと思います。

I 特集 東日本大震災に対する支援活動について

HUVCでは、ガレキ撤去作業と平行して、野田村の皆さんとの交流活動も積極的に行ってきています。その交流活動の中心的な存在である日野口早希さんに、交流活動の様子を語ってもらいました。

野田村の方々との関わりを通じて

人文学部現代社会課程法学コース3年 日野口 早希

野田村への瓦礫の撤去作業の傍ら、野田村の方々との交流活動もありました。

6月に行った弘前の小学生から野田村の方へお手紙を渡すという企画では、小学生が純粋な気持ちで書いた手紙が、野田村の皆さんの心に響いたようです。後になって野田村の方々とお話すると、今でも「嬉しかった」「感動した」という声をいただきます。

7月には、野田村のマスコットキャラクターののんちゃんのねぶたを作ることになり、弘前市民の方々の協力で3週間で完成させることができました。弘前ねぶたまつりでの運行3日間のうち1日は野田村の方がねぶた祭りに招待されるという予定だったので、野田村の方々に弘前で「のんちゃん」のねぶたを見てほしい、弘前の人にはもっと野田村を知ってほしいという思いで頑張りました。野田村の方からは「他の大きなねぶたよりものんちゃんのねぶたが一番かわいい」という声をいただき、喜んでくれたようでした。8月の下旬には、野田村からのオファーで野田村復興イベントにのんちゃんねぶたを運行することになり、とても嬉しかったです。

交流はこのようなイベントの機会だけではなく、野田村に行った当初はまちを歩いていてもどこかよそよそしいところがありました。しかし、今ではお互い顔の

見える関係が出来上がってきました。野田村の方とお話をした時や、野田村の美味しい豆腐田楽をいただいた時に「またここに来たいな」「また、野田村のこの人に会いたいな」という気持ちになります。村を歩いていると顔なじみの野田村の方は、「また来てくれたのね」といって喜んでくださり、ジュースやお菓子、とれたての野菜をくださることもあります。まるでおばあちゃんや親せきに会いに来たかのようなのです。このような関係作りこそ交流の醍醐味だと思います。今後は、野田村の歴史や文化について触れもっと野田村の方や野田村について知り、これからもこれまで築き上げた関係を大切にしていきたいと思っています。



小学生によるお手紙プロジェクト（2011.6.15）

このような交流活動の一環として、8月の弘前ねぶた祭りの際に、弘前市民の方のみならず、青森市民の方にも協力を頂いて、野田村のマスコットキャラクターである「のんちゃん」のねぶたを作成しました。そして、弘前大学ねぶた実行委員会の皆様のご好意で、大学のねぶたと一緒に運行させて頂きました。その経緯を含めて、「のんちゃんねぶた」の発起人である南部真人君に話してもらいます。

のんちゃんねぶた

理工学部地球環境学科4年 南部 真人

「のんちゃんのねぶたを作って運行させたい」7月初めのある日、僕は事務局の話し合いで提案しました。

さけの稚魚をイメージした「のんちゃん」は、さけの養殖が盛んな野田村の大人気キャラクターです。村には大きな像が建っており、バスやマンホールにも描かれています。そんな人気者ののんちゃんをねぶたにして、多くの人たちに見てもらい喜んでほしい。提案のきっかけ

はこのような理由でした。

ねぶたまつり本番、弘大ねぶたと一緒に3日間の運行をさせてもらいました。

- 1日目、この日は野田村から40名を招待しており早速お披露目。時間の都合で待機中の状態しか見てもらうことができませんでしたが、それでもみんな嬉しそうにたくさんの写真を撮っていました。7時からの運

行では、大勢の学生や弘前市民たちが集まり「ヤーヤドー」のかけ声とともに大盛り上がり。

- 2日目、この日のためにわざわざ青森市から駆けつけてくれた人や、運行前にビールを飲みまくる人…。こんな愉快的なメンバーも加わり、1日目よりもたくさんの方が集まりました。
- 3日目、降水確率60%・ゲリラ豪雨注意報！しかし!! 数粒の雨が降ったかと思うと雨雲は消え青空に。天気も味方につけ、参加者も3日間で一番多く集まり、堂々と最終運行を終えました。

ねぶた制作初心者ばかりで製作期間もわずか3週間という厳しい状況。それでも大勢の人の協力によって、素晴らしいのんちゃんを仕上げることができました。運行当日も本当にたくさんの方が集まって一緒に盛り上げてくれました。僕の何気ない提案がたくさんの方の支えにより実現することができたことに感謝しています。後日、野田村の祭りでも運行させてもらうことができ、のんちゃんねぶたを見た野田村の人たちからは「ありがとう」「すごくかわかった」などと言ってもらえます。大勢の人に喜んでもらえた。これが僕にとって何よりのご褒美です。

8月27日28日の2日間、「野田村復興イベント」が開催され、「のんちゃんねぶた」は、北明ねぶたの会の扇ねぶたとともに、このイベントに出陣しました。このイベントの様子は、田上晃央君に伝えてもらいます。

野田村のために

理工学部地球環境学科 3年 田上 晃央



復興イベントの様子を伝える新聞記事
(陸奥新報 2011年8月28日1面)

僕は、野田村にて震災ボランティアを4月12日からずっと参加し続けてきました。がれき撤去、側溝の泥上げなど様々なことをしてきて、弘前大学ボランティアセンターを運営する側である事務局になりました。色々忙しいこともありますがすごく充実した毎日を送っています。

7月になってから野田村のキャラクターであるのんちゃんのねぶたを作ることになりました。そして8月初旬に行われたねぶた祭りに参加しました。僕自身は1日目しか参加できなかったのですが、とても盛り上がり、ねぶた祭りを見に来た野田村の方も喜んでくださったと思います。また、ねぶた祭りで作ったこののんちゃんねぶたを野田村の復興祭で運行することが決まり、8月27日に野田村復興祭に参加しました。

この復興祭は、野田村の1日も早い復興を願い、地域住民と全国各地の支援を募って開かれたものです。僕は、弘前でねぶたを運行するのが今回が初めてで、さらに野田村でも運行することになって、最初はものすごく不安でした。弘前以外でねぶたを運行するのははじめてだったので、現地にいったらわからないこともあり、備品が足りなくて、現地で調達しなければならなかったり、色々問題がありました。しかし、市民の人や、学生の人たちがすごく支えてくださって、僕の不安もすべて吹き飛んで、野田村の方に少しでも元気を、そして、復興のきっかけになればいいなと思いのんちゃんねぶたを運行しました。無事に終わることができてとても嬉しいです。今回の復興祭を通して感じたことは、人の力のすごさをより強く感じさせられました。これから先も人の力を感じながらボランティアに参加し続けようと思います。

I 特集 東日本大震災に対する支援活動について

HUVCのこれらの活動については、学生事務局に所属する10名のスタッフの活躍を抜きに語ることは出来ません。様々な活動の中心には、つねに学生事務局スタッフがいます。その学生事務局の活動内容を、スタッフの一人である松山憂紀さんに説明してもらいました。

学生事務局として

人文学部現代社会課程法学コース3年 松山 憂紀

現在、学生事務局は10名で活動させて頂いています。その主な活動内容としてまず、野田村での活動が決まるとメーリングリストで参加者を募集します。活動当日は現地へ向かうバスの中でオリエンテーションの司会や現地での活動をスムーズに行うことが出来るように事前に班分けをし、また、帰りのバスの中では1日の活動を通しての感想を参加者の皆さん1人1人に伺い、アンケートを記入して頂いてそれを集計し、その日の活動内容をブログに載せるという仕事を主にしています。

この他に、夏には野田村のマスコットキャラクターである鮭の稚魚「のんちゃん」のねぶたを学生事務局の発案で多くの方々の協力を得て作成し、弘前ねぶたまつりと野田村復興イベントで運行しました。現在は文化祭へ向けて野田村や支援活動について展示するパネルの作成や、野田村の特産品を売る物産展等の準備を行っています。

私はこの野田村の支援活動に初めて参加させて頂いた時、テレビを通して見ていた被災地の光景より実際に目にした光景の方が被害が大きいと感じ、とてもショックを受けました。しかし、活動を重ねるごとに瓦礫が少なくなっていく様子が見てわかり、継続して物事を行うことの重要性と人の力の大きさを感じました。それと同時に、これまで活動を通して学生同士だけではなく、多くの市民の方や野田村の方々と交流することができたことに喜びを感じ、人と人とのつながりの大切さというものを実感しています。今後も活動に積極的に参加し、いつの日か震災前の元の姿に戻った活気溢れる野田村を見たいと思っています。これを実現させ、支援・交流活動が野田村の方々と私たちの双方にとってより良いものとなるように学生事務局として精一杯活動していきたいです。

3 学生ボランティアの意義

HUVCの学生ボランティアは、「チーム・オール弘前」の一員として、市民の皆さんとともに野田村へ通っています。ここでは、学生ボランティアの活動をサポートして下さった皆さんに、学生ボランティアの意義について伺いました。

まず、20回以上にも渡って野田村で活動された、弘前市民の清藤洪三さんと神照文さんに、学生と一緒に活動して感じたこと、考えたことを語っていただきました。

ス コ ッ プ

清藤 洪三

震災から半年が経過し、私達の野田村へのボランティア活動も、当初の瓦礫撤去作業が主だった言わば肉体労働から、被災された人々とのコンタクトを図り、僭越な言い方をすれば精神的ケアを支える方向に変化して行くのかも知れません。

バスの車内で、自己紹介と作業後の感想を全員が述べ合います。ある時、福島県出身の女子学生が感極まって泣きながら自己紹介したのが、今もって印象に残っています。帰途の感想発表の時は、朝の自己紹介では「役に立てるのか自信が無い。」とか不安気に話していた人が一様に、「思い切って参加してよかった。これからも機会があれば参加したい。」等、自信に満ちて感想を述べるのが

常で、経験者としては、「そうでしょう!」と、こちらも良い気分になったものでした。

こうした短時間で自己の考えを発表し、また他人の意見をも聞く事は、様々なシーンでのプレゼンテーションの練習になっているものと思います。

従来、弘大生は真面目であるとの印象があったのですが、炎天下での我々経験者でも音を上げる様な辛い作業も厭わず、何事にも真摯な態度で接する学生の皆さんを見ると、尚更の感があり、若干の年長者として彼らの純粹さ共々見習わなければと思っています。

今後も、チームワークを図り、最終的には野田村の人々と共に、心から笑い合えればと願っています。

大震災の教訓を次なる世代へ

神 照文

大震災後、一人ひとりが「今できることは何か…」問いながら参加し、一つの目的に向かって、ガレキ撤去、側溝の泥上げ、民家・畑の汚泥土の排除、物資の仕分け等に、ただひたすらに黙々と取り組んできました。そこには、多くの言葉はいりません。そこにあるのは、実践行動のみです。

私は野田村へ行くのが楽しみでなりません。今日は、どんな学生さんと一緒に活動できるのかワクワク感やドキドキ感でいっぱいでした。私が、これまで延べ20回続けられたのは、やはり学生さんの存在が大きかったと思います。参加された多くの学生さんに感謝したいと思います。私の子どもより年下で、孫たちよりも年上、そんな学生さんに囲まれながら時を過ごしたことは、生涯忘れ得ないでしょう。また、40年前にタイムスリップして懐かしき学生の頃と重ね合わせ、これまでの

人生を振り返らせてくれたことも有り難かったです。お陰で「幸福感」でいっぱいです。

今の子どもたちは、社会経験が乏しいと言われており、その延長線にある学生さんですが、この度のボランティア活動を通して多くのことを直に心身で学んだのではないのでしょうか。彼らのガレキ撤去の活動を見ていて、本当に一生懸命です。常に身体を動かし、誰一人として休んでいる者はおりません。顔からは、玉のような汗をびっしょり流しながら取り組んでいる様に、ただただ感心するばかりです。是非に、この度の震災で得た教訓を次なる世代へとつなげていただきたいと願っています。

最後に、私たち参加者が困らぬように導いてくれました人文学部ボランティアセンターの事務局の教員の皆さん、そして学生スタッフの皆さん本当に有難うございました。

学生の活動を先頭に立って、あるいは横に寄り添って支えてくださったのが市民の皆さんだとすれば、後ろから支えてくださっているのが、弘前市の行政担当者の皆さんです。今回は、弘前市役所の庄司輝昭さんに、市民と学生が一体となった「チーム・オール弘前」の活動の意義について、お話を伺いました。

チーム・オール弘前へのエール

弘前市役所企画部企画課 庄司 輝昭

3月11日以来、東日本の海岸線に沿った広大な地域に、多数のボランティアが長期間にわたって活動しています。活動の仕方は様々ですが、岩手県野田村に対する弘前市発のボランティアの支援は、チーム・オール弘前として継続的に行われています。

野田村支援が早い時期から行われたのは、弘前大学教職員がいち早く支援に動いたこと、弘前市長が全面的にバックアップする決断をしたことなどが大きな要因です。これに加えて、弘前大学人文学部ボランティアセンターHUVVCと弘前市市民との協働推進室が置かれたことによって支援を継続するための外枠が確立しました。

実際の支援活動は、弘前市社会福祉協議会やNPO、市民・学生有志のボランティアにより進められてきましたが、なかでも最も汗をかいてきたのが最前線に立った市民・学生によるボランティアでしょう。その活動状況は、発災以来半年近く続けられたHUVVC「野田村支援活動報告」によって知ることができます。参加した学生はスコッ

プの使い方から教えてもらうなど、ボランティア活動の中で成長し、市民のボランティア活動は、学生がいたからこそ被災地支援の原点を振り返りつつ進めて来られたものなのではないかと思います。

チーム・オール弘前の野田村支援活動という、地道で継続的な活動があっからこそ、今の野田村住民との信頼関係があります。この信頼関係は、市民と学生の真摯な姿勢とたくさんの汗を流した活動によって育まれてきたものです。

9月からの災害ボランティア受け入れ休止により、これまでのチーム・オール弘前の活動は、今後は支援から交流へ、より一層相手を見、寄り添いながらの活動になるでしょう。

弘前市では、これからも野田村の復興に向けて長期的な支援を行う必要があると認識しておりますので、チーム・オール弘前として進めてきた協働の枠組みについて、これまで同様継続していきたいと考えております。

I 特集 東日本大震災に対する支援活動について



「チーム・オール弘前」の活動を語る上で外すことのできないのが、学生事務局の活躍です。先ほど紹介してもらったように、学生事務局はバスの中のオリエンテーションなどの活動の他にも各種の交流活動の企画立案を行っています。この学生事務局を指導されてきた人文学部の山口恵子先生に、その活動の意義についてお話をいただきました。

雨の中の交流活動（2011.9.17）

学生事務局という名の宝物

人文学部 山口 恵子

早くも冬の入り口、時の流れは速い。この間、ボランティアセンターを経由する活動には、多くの人々の参加・支援があり、本当に頭が下がる。そのなかでも、ここでは学生事務局について少々振り返ってみたい。

現在、ボランティアセンターには学生事務局員が10名いる。今回の野田村支援・交流活動は、学生事務局なしにはありえなかったと思うし、彼／彼女らにしかできないことがあった。事前・事後の連絡、定期支援バスの中でのガイダンス、活動中の連絡や指示、イベントの準備・実施・事務局の学生は、運営面の膨大な作業を担っていた。学生の的確な指示にすっかり甘えて、バスの中でグーグー寝てばかりいた私は反省しきりである。

そして何よりも大きいのは、学生事務局が、ボランティアに来る学生にとっては同じ学生同士の身近な存在として、一般市民の方にとってはちょっと頼りないけれど温かく見守るべき存在として、気軽に話をしたり、笑いをとったり、相談にのったりしてくれていた。これは教員にとっても同様で、ついつい事務局の学生をつかまえてグチったりしていたのは、私だけではあるまい。人が入れ替わる自由参加のボランティア活動にとって、また厳しい現場において、こうした存在はとても大切な意味を持っている。

しかし同時に、学生事務局は、教員と、一般市民と、

自由参加のほかのボランティアの学生との間に立って、多くの苦労があった。みんなの間で話を聞いているゆえに深まるジレンマ、教員事務局との間の情報の共有ミス、活動が広がるに従って曖昧になる作業分

担や責任の所在…。授業や就職・サークル活動なども同時並行しつつ、大変だったろうと思う。今後の継続的によりよい活動のためには、情報をきちんと共有し、作業を上手に分担していくこと、教員のバックアップ体制を充実させることが必要であろう。また、1、2年生の新しい事務局員を迎え入れることも、目下の大きな課題である。

最後になるが、一緒にいろいろな山を乗り越えつつ、事務局の学生たちがどんどん成長していく様子を見ることができたのは、教員としては大きな喜びだった。こうした地域に貢献できる学生を皆で育てていくのは、センターの大きな意義であると改めて実感するこの頃である。



交流活動の案内を持って仮設住宅を訪問（2011.9.25）

4 今後の活動に向けて

最後に、これからの学生事務局の活動を引っ張っていくことになる2年生の荒井智子さんと、HUVVC事務局で中心的な役割を担っておられる人文学部の李永俊先生に、今後のHUVVC、そして「チーム・オール弘前」の活動についてお話をいただきました。

震災を乗り越えて

人文学部現代社会課程法学コース2年 荒井 智子

2011年3月11日に誰もが想像もしなかった大地震が発生しました。東日本大震災の後すぐに始まったこの学生ボランティア活動に初めて参加した時、私は表現できない虚無感を感じ、また被災地の震災被害を目の当たりにして、その光景が今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

私たちにとってはもう半年以上もの前の出来事となってしまった東日本大震災ですが、野田村住在の方々や、

震災の影響を大きく受けた方々にとってはたった半年しかたっておらず、まだまだ震災前の生活水準には到達していません。そしてこれから、復興には長い時間がかかることでしょう。そういった残っている今後の課題に対して私たち学生ボランティアは弘前市民ボランティアの皆さんと協力をして、岩手県の野田村への支援を行っています。

9月末にがれきの撤去作業が終わり、現在は野田村の子どもたちと仮設住宅近くのグラウンドを利用してペットボトルロケットで遊んだり、季節を感じる押し花づくりを一緒に行うなどして、野田村住在の方々との交流を深めています。また、今後の野田村活性化に役立てるため、塩や豆腐田楽など野田村の特産品を販売するイベントなど積極的に企画しています。今後は冬季に向けての雪かきボランティアなど、寒さや雪への対策を行っていかうと考えております。

私たち学生ボランティア事務局はこれからも野田村へ

の支援に尽力していきますが、今一度、学生のみならず、地域住民のみなさんにボランティア活動に協力していただきたいと思っております。時間と共に忘れ去られてしまいがちな被災者の方々の生活に支援の手を差し伸べていただきたいのです。そして、メディアを通して見る被災者の現状と肌で感じる被災地の現状の違いをみなさんにも体験してもらいたいです。

結びになりますが、震災復興支援を通して広がる輪をこれからも学生ボランティア事務局としてお手伝いしていきたいと思っております。

支援から交流へ

人文学部 李 永俊

私たちが4月から通いつけている野田村では、ガレキ撤去などへの住民のニーズが減少してきたため、9月5日以降、県外からのボランティアの受け付けを休止するという公式な発表がなされました。これは、ガレキ撤去が進み、復旧・復興への確実な足音が聞こえてきたことの証であり、何よりも嬉しいお知らせでした。

実際、ガレキが散乱していた被災現場は、新しい家の建設を待つ更地となり、全壊に近い状態で残されていたお宅も、順調に改修工事が進んでいました。8月の末に訪れた時、中を見せてもらいましたが、そこが人の肩の高さまで津波に襲われて泥まみれだったことは想像もつきませんでした。家主さんは、畳を一つ一つめくって、床下の泥まできれいに片付けてくれたボランティアのおかげだと、何度も手を合わせてくれました。

「チーム・オール弘前」では、4月以降週1回の定期便を出し続け、22回、述べ参加人数は約750名に上りました。5か月に及ぶ活動の中で、誰一人けが人もなく、任務を全うできたのは、言うまでもなく参加者一人一人が高い意識を持って活動してくださった結果です。この場

をお借りして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、何よりも毎回我々のバスを見つけると大きく手を振って迎えてくれ、遠くからでも声をかけてくれた野田村の皆さん、遠くにいる孫が遊びに来たみたいと言いながら学生の手を握ってくれた野田村の皆さんに、「チーム・オール弘前」を代表して心から感謝申し上げます。

今後は、野田村が元の姿に戻るまでの支援・交流活動の第2段階として、野田村の皆さんに寄り添った活動を展開していきたいと考えています。喪失感や大きな心の傷は、寄り添う人々の温もりで幾分は癒されるのではないのでしょうか。同じ空間で一緒に作業をしたり、何気ない会話を交わしたり、温かいお茶をすすったり、というような場作りがこれから何より大事だと思います。活動を継続するためには今まで以上に市民の皆さんのお力が必要です。今後とも温かいご支援、ご協力をお願いいたします。

弘前大学人文学部ボランティアセンター活動の歩み (2011年)

3月11日 東日本大震災発生	6月10日 第1回活動報告会
3月23日 「人文学部の被災学生援助(震災復興協力)を考える集い」開催	6月18日 第11回支援活動
3月24日 (仮称)「弘前大学 ボランティアセンター」発起人の集い開催	6月22日 第12回支援活動
3月29日 野田村視察	7月2日 第13回支援活動
4月12日 第1回支援活動	7月6日 第14回支援活動
4月18日 第2回支援活動	7月16日 第15回支援活動
4月25日 第3回支援活動	7月20日 第16回支援活動
5月6日 第4回支援活動	7月28日 第1回「チーム・オール弘前」ワークショップ
	7月30日 第17回支援活動
	8月1日、3日、5日 弘前ねぶた祭りで「のんちゃんねぶた」を運行
5月11日 第5回支援活動	8月10日 第18回支援活動
5月14日 第6回支援活動(臨時便)	8月17日 第19回支援活動
5月18日 第7回支援活動	8月24日 第20回支援活動
5月25日 第8回支援活動	8月27日 野田村復興イベントで「のんちゃんねぶた」を運行
6月4日 第9回支援活動	8月31日 第21回支援活動
6月8日 小学生によるお手紙プロジェクトスタート(15日、16日、17日)	9月17日 第1回交流活動
第10回支援活動	9月25日 第2回交流活動
	10月15日 第3回交流活動



第1回活動報告会の様子
(2011.6.10)



第1回ワークショップの1コマ
(2011.7.28)



開催宣言



パフォーマンスLIVE
大道芸サークル



特殊撮影研究会



大学会館広場
ステージ設置記念式典

第11回弘前大学総

弘前大学学祭本部実行委員会

今年も無事に弘前大学総合文化祭を開催することができました。今年は10月21日から23日の3日間の総合文化祭期間中に8600人もの方に会場へ来ていただき、昨年を上回る多くの方々にお越しいただきました。年々、来場者の数や企画の数が増えていき総合文化祭が一步步発展していることを感じます。

さて、今年の総合文化祭は『SPREAD』のテーマで開催されました。今回、このテーマを定めるにあたり3月に起きた東日本大震災の復興に向けたメッセージを織り込もうと学祭本部実行委員会で決めました。『SPREAD』には、広まるや広めるという意味があります。また、『SPREAD』の一文字一文字に Smile、Peace、Relaxation、Energy、Amusement、Dreamの6つの単語をあてはめ、笑顔、親睦、やすらぎ、活力、楽しみ、夢が弘前大学から、弘前市、青森県、東北地方、日本全体に広がっていくようにという思いを込めました。当日は雨が降ったりやんだりの天候でしたが、多くの方にご参加、ご来場していただき多くの思いを広めることができたことと思います。また、出店団体から東日本大震災の復興支援のために売上げの一部を募り、集まった募金を弘前大学を通じて復興のお役に立てるように使わせていただくこととしました。

本学の総合文化祭の一つに学部祭というものがあります。各学部の研究室やサークルが研究成果の発表や展示を行うものです。今年は数年ぶりに人文祭が開催され、5学部全ての学部祭が行われました。案内所では人文学部の郷土料理の研究

合文化祭を終えて

実行委員長 山口 維尚

発表や野田村復興支援について聞かれることも多く、人文学部が行っていることに来場者が強く興味を持たれていることが印象的でした。他にも、教育祭は親子で来場されている方にとても好評でしたし、医学祭は普段見ることの出来ない器具の展示や、体の測定が好評でした。収穫祭では学生が育てた野菜や果物、花卉などが販売され、賑わっていました。理工祭ではロボットの展示などが小学生に人気でした。地域の方は大学がどのようなことを研究しているのかということに興味を持っています。来年以降も5学部そろって学部祭を開催できることを願っています。

第11回目の今年の総合文化祭では、遠藤学長からとても素晴らしい常設ステージを用意していただきました。ステージ上で発表した出演者の方やお越しいただいた来場者の方にも大変好評でした。このステージとともに総合文化祭が更なる発展を遂げることを願っています。

今回総合文化祭を開催するにあたり、地域の企業の方や大学の教職員の方、出店団体の方など多くの方々にご協力いただきました。また、私自身実行委員会のメンバーにもたくさん助けられました。この場を借りて多くの感謝の気持ちを伝えたいと思います。そして、これからの総合文化祭がますます発展し、弘前大学の発展に貢献することを願っています。ぜひ、来年もご参加、ご来場くださいますようお願いいたします。



売り上げの一部は東日本大震災復興に寄付します。



弘大パズル
貼ってつながるべたべたアート作品



Final Festival
乾杯

「言語力」とは、読む力・書く力・調べる力・伝える力を含めています。

弘前大学附属図書館は、学生の皆さんに「言語力」を養ってもらおうと、平成17年度より「言語力」大賞コンテストを実施しています。第7回コンテストの受賞作品から部門テーマI「文学作品部門」の大賞を掲載します。

匂わぬ金木犀 大賞 人文学部3年 西谷 早織

咽返る様な、金木犀のあの甘ったるい香りは、今日の雨に吸われてしまったのか。私の鼻にまでは届かなかった。薄墨を零したような空に映える黄色の花が、細かな雨に打たれ、頻りに震えていた。

座敷と縁側とを分ける障子を開け放ち、それに私は凭れていた。家の中とも外ともつかないここは、肌寒い。何か羽織るものを探して座敷を見渡すと、藍色の羽織が目についた。膝の上の本を床に置き、座布団を積み上げた横に乱雑に丸まったそれを、手早く着込んだ。深海のような色のこれは私の物ではなかったが、部屋の奥に居る持ち主へ、借用の意を込めて一瞥をくれてやって、先程の位置へ座り込んだ。再び両手に広げた本の表紙の、ざらりとした感触が、冷えた手にやけに鮮明だった。

規則正しい足音が、冷たい風に流されること無く、鼓膜を振るわせにやって来た。父母のどちらかが、私か或いはこの部屋に用があるらしい。

「ここに居たのか。」

現れたのは父だった。

「家に帰って来ると、お前はここにはばかり居るな。」

どうやら、用があったのは私の方のようだ。襖の隣で立ち止まった父は、私から目を逸らさない。見られることは別に気にならない

かったが、詮索するような目を隠しもしない所は父らしくなく、それには多少の居心地の悪さを覚えた。

「自分の部屋が、気に入らないわけではないのです。」

何か返答せねば永世そこに居続けるのではないかと、歳にそぐわないことを考える程度には、私はこの空気を苦痛と感じたようだ。無意識に振るった喉からは、およそ温度の無い声が出た。

それを気にした様子も無い父は、初めて私を視界から外した。その目は、今は庭へと向けられている。もしかしたら、あの花の色が目についたのかもしれない。

「暇をしているなら家のことを手伝え。」

丸々と肥えた雨垂れが軒先から手を離す瞬間のように、唐突に父が零した言葉には、私のそれと同様に、些かの温度も籠っていなかった。それ故に、その言葉が本心でないことが、私には分かった。

「今読んでいる本が、面白くて。」

左手で本を持ち上げ、父に向けて振ってみせる。撓んだ紙が空気を打って音を立てた。それが面白いわけではないだろうが、父は口の端を少し上げ、微笑んで見せた。弟の顔立ちは母に良く似ていたが、こんな風に微笑む時だけは父に近い顔に思われた。愛想笑い

と呼ぶべきそれは、今のこの場に似合いなのだろう。現れるのが突然だったならば、それが消えるのもまた、突然であった。

「いいのか。その羽織はあいつの気に入らなからな。」

ワイシャツの上に纏った羽織は私のものではなく、弟のものだ。私が深海のように感じたこの色を、弟は異国の石の色だと表現した。肌寒さを凌ぐ目的で着ただけとは言え、西洋のものに東洋のものを合わせている姿はともすれば不恰好で、どこかアンバランスだった。

「ご心配なさらず。さっき、借りると断りましたから。」

そう返すと、父は奥の弟を一瞥し、顔を顰めた。弟の微笑んだ顔が父に似ているならば、顔を顰めた父は、そうした時の私によく似ていた。平生の私の顔は、両親のどちらにも似ていなかった。

父の肩が、続いて口元が、静かに蠢めいた。

「本を読むのは楽しいか。」

私は、一見単純な二択であるこの問いが、ただそれを装っているだけのものだと気付いた。弟に似た顔で微笑んだつもりなのであるが、父の顔は強張り、声も僅かに囁れていた。

「分かっています。」

父の目に向けて、唯一言だけ返した。父の目も同様に、訝しげに揺らぎながらも、私を捕らえたま

まだった。

「——そうか。」

たった三文字を紡ぎ出すには不釣り合いな時間が流れた後、ようやく父は踵を返した。来た時と同じ規則正しい足音を、雨の音は掻き消してはくれまい。水を含み、泥のようになった土でさえ穿てぬ雨に苦々しさを感じながらも、これならば黄色の花も落ちることはないだろうと思えば、少し気が楽になった。

「直ぐに自分と人を比べるのは、兄さんの癖だね。」

それも、悪い癖。

去年の夏のことだったろうか。突然そう切り出した弟に困惑した覚えがあった。けらけらと軽やかに笑う弟の様子は、今し方兄の短所を指摘したと言うには似つかわしくなかった。それに少し呆れたのも、覚えている。

「私は他人を論破しないことには落ち着かないんだよ。」

「自分に自信が無いからね。」

生来表情の乏しい私は、そのような感情を顔に出さずに言葉を返し、生来表情の豊かな弟は、どのような心境か顔を変えずに言葉を続けた。少しの間言葉を紡ぐ代わりに、夏の暑く湿った空気を胸に詰め込んだ。意味も無く持ち上げた右手が、宙をさ迷った後、頬へ触れた。

「自分より格下の相手だと決め込むと、楽に話せる。」

あの時、私が親指の腹で唇を撫でたのは、今思えば、恐れたからかもしれない。純真な弟に自分の汚らしい考えを露呈させることに、若しくは、弟がそういった部分を持つ私を卑下することに。どちらにしろ、真実を話す必要など

無かった。意思疎通というものの核心は、互いの全てを把握することではなく、相手の心の内に自らの虚構の像を造り上げることにある。それでも私が偽りを語らなかつたのは、仄かな期待があったからだ。弟ならば、私の穢れた部分までも受け容れてくれるのではないかと。エゴだとは分かっていた。けれども、私は博打の熱に負けたのだ。

「じゃあ、僕もなの。」

「僕も兄さんにとっては、取るに足らない、詰まらない人間なの。」

身の内を氷が滑り落ちたとも、雷に打たれたとも着かない、衝撃だった。その割に、私の視線はゆっくりと左隣の弟へと向いた。瞬時に萎縮した左胸のせいで息苦しさを感じた。外を見ていたはずの弟の視線とかち合うと、それは膨張し、再度急激に萎縮した。先程感じた苦しさに今回もまた襲われたが、私は無表情のままであった。生来、私は表情が乏しいのだ。

私は、この時弟が、私がそうしたように、博打をせずにはいられなかつたのだと気付いていた。ふっくらと隆起した頬や緩やかに弧を描いていた口元が垂れ下がり、凍ったのではないかと思うくらいに硬くなっていたからだけでは。何よりも、弟の目で、私はそれを知ったのだ。瞳から気持ちが汲み取れぬほどには、我々が共有した時間は短くは無かつた。気付いていて、私は答えたのだ。

「どちらだって、構わないだろう。」

期待を裏切られたという小さな落胆の代償に、幼稚ながらも確実な言葉で、弟に絶望することを強

いたのだ。

予想通りに唇を噛んだ弟に、優越感を覚えたのは一瞬であった。私は取り返しのつかぬことをしたのだ。取り繕っても全てが言い訳にしかならぬようになるのだ。私がどれ程、冗談だったと、お前は大切な弟だと言おうが、弟の中に出来上がった私の像は、それを鼻で笑うだろう。愛されることしか知らず、愛することしか出来ない愚かな弟は、限りなく肯定に近い返答にどれだけ傷ついただけだろうか。それでも優しい弟は、一言、そうか、と告げて部屋を出て行った。ああ、そう言えば、お前はそういうところも父さんに似ているね。

一時の間過去に溺れ、気付けば弟の前で膝を折っていた。私の手は今尚冷えていたが、それは単に秋の雨風によるものでは無い。弟へと伸ばした手が小刻みに震えたのも、寒さの所為では無かつたのだ。やっとのことで弟を抱き上げると、改めて随分軽くなったものだと思う。重厚な刺繍の入った着物を着ている割には、アンバランスな重みだ。

「聞いてくれるかい。」

怒っているわけではなかつたが、私の問いかけに弟は答えない。だからと言って、それに甘えて引き下がることなど出来なかつた。喉を突き破ろうとする言葉が、自省なのか謝罪なのかは、自分でも分からなかつた。

弟よ。お前に対する気持ちは常に、憧憬と嫉妬が濁り淀んだ水底であった。私が必死に、お前の内に虚栄の像を作り上げるほど、お前が私の内に生み出した純朴なそ

Ⅲ 第7回 弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト

れが眩しく思われた。我々の違いは唯の個性だと受け容れられぬことを、お前の存在を責めることで片付け、同時に、何時も私を見捨てない清い存在として依存していた。お前はその純真さで、愚かな私を露呈させてしまうのだ。

弟よ。私にとってお前は、黒くて重い、足枷だったよ。そしてお前は、そのことに恐らく気が付いていた。それなのに、その枷を外す鍵を、水底の汚泥の中の私へと、何度も投げ込んでくれていたんだ。

「受け取らなかったのは、私だ。」

角張った弟の表面は、最早以前のように滑らかではなかった。

「あんなことを、伝えたかったわ

けでは無いんだ。」

弟がこうなってから、私は初めて泣いた。嗚咽を上げて泣くのが雷鳴を伴う豪雨であるならば、目から静かに溢れ、頬を濡らす私の涙は、丁度先程の雨のようであった。

「せめて一度でも罵ってくれば、こんなに辛くは無かった。」

そう思うのも、結局は私のエゴでしかない。

「兄さん」

弟が私を呼んだ。返事はせず、私は抱き上げていた弟を手放す。そのまま立ち上がると、目の前の塗りの筆筒の引き出しに、手中の本を――弟の日記を――仕舞った。弟が十六になった日に、私が

買ってやったものだ。一ページ目には日記をもらったことが、二ページ目には夕餈^{ゆうげ}に鶏が出たことが、三ページ目には新しい竹刀を貰ったことが書いてあった。見つけてから幾度も繰り返し読んだ日記は、すっかり頭の中に入ってしまった。

母が私を呼んだ。大方、弟の私室の家具を動かす人手が欲しいのだろう。長いこと居座った座敷を出る前に、私は一度だけ振り返った。

骨になった弟に捧げる線香のせいで、雨が止んだ今も金木犀の香りはしない。八日前に贈った日記は、思い出を辿^{たど}るには余りにも白かった。

『言語力』大賞コンテスト実行委員会委員講評

弟との間に露呈する心理的な葛藤。そこから生じる主人公の苦悩と後悔。その描写がきわめて巧妙ゆえに、兄弟間の悲劇性を読み手に強く訴える。父親の描き方も光る。抑制の効いた屈折度の高い文章が、作品世界に誘うのである。つまり、淡々とした文章であるがゆえに、読み手の心情の深いところで共鳴するという効果が現れているのだ。作品の前半の伏線が、後半部において鮮やかに活かされていて、みごとだ。わけでもラストの二行は、すごい。

第7回 弘前大学学生『言語力』大賞 コンテスト受賞者一覧

I 文学作品部門（ジャンルは自由）

- 大賞 西谷 早織（人文学部3年） 「匂わぬ金木犀」
- 優秀賞 川田 健登（農学生命科学部1年） 「虹のみえる町」
岡部 麻由（人文学部2年） 「わすれんぼうさん」
名取 史晃（農学生命科学部2年） 「好き・嫌い」
- 佳作 前田 泰裕（教育学部4年） 「真か相（うそ）か」

II テーマ部門（「東日本大震災」）

- 優秀賞 佐藤 雄哉（教育学部4年） 「[拡散希望]が拡げたもの」

第6回学生生活実態調査のまとめ

第6回学生生活実態調査委員会委員長 児玉 忠
(文責 松谷 秀哉)

弘前大学では弘大生の大学生生活の状況を把握するためにアンケート調査（学生生活実態調査）を4年ごとに実施しています。これまでに6回の調査が行われ20年が経過しました。第6回の調査は昨年だったので記憶されている方も多いのではないかと思えます。この集計結果は今年の3月に報告書がまとめられ、大学のホームページからも閲覧することが出来ます（ただし学内限定公開）。
<http://www.hirosaki-u.ac.jp/jimu/gakumu/gakunai/jittaichousa.pdf>

本稿はおもに20年間における学生生活実態調査の結果・変化について簡単にまとめたものです。この20年間で大学を取り巻く環境・情勢は大きく変化しましたが、結果を見る際にはこれらの事を考慮しながら見ていく必要があります。具体的には、国の行財政改革による国立大学の法人化、学部改組と教養部の廃止、入試制度の多様化、経済や就職状況の変化・悪化、ゆとりの教育による学力低下問題、などです。ところで、調査ごとにアンケートの質問内容や形式、データの集計方法が変更になっているものがあり、単純には比較できない項目もあることをご承知おきください。加えて第1回調査の報告書は手元になかったため、このデータは欠損しています。

まず調査の実施概要ですが、第4回までは弘大生の4, 5割を対象にしたサンプリング調査でしたが、第5回以降は全数調査になりました。回収率は第3回までは50%以上と高い値を維持していましたが、それ以降、多少の変動があるものの低下する傾向にあります。回収率は調査の信頼性に直結しますので、大学側は実施環境の改善を、学生の皆さんには回収率アップにご協力をお願いいたします。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
回収率 (%)	72.0	56.3	26.6	39.0	21.0

大学への進学理由や弘前大学への志望理由についてはあまり大きな変化はありません。進学理由としては、学問・知識や技術といった専門性の修得、といった本来的な理由の割合は依然として高いですが、一方で、資格や学歴を得る、といった実利的な理由の割合も増加してきています。また弘前大学への志望理由は、国立大学（ブランドイメージや授業料）、志望する専攻、能力・学力に適していた、といった理由が高く、後者の二つについては増加傾向です。また、弘前大学が第一志望の割合は毎回52%前後とほとんど変わりありません。この値は全国大学生協連の調査（全国平均）と比べると10%ほど低くなっています。このことから、弘大生は目的意識がある中で現実的な選択をしている、といった様子が窺えます。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
大学進学の志望理由 (%)					
専門知識や技術の修得	61.9	64.5	63.3	63.5	59.9
教養の修得	45.2	40.7	44.4	43.6	43.8
資格をとる	38.7	35.9	46.9	44.4	35.0
学問研究のため	27.1	34.7	43.1	42.7	48.3
学歴を得るため	27.2	23.8	35.6	43.5	46.6
弘前大学の志望理由 (%)					
国立大学（法人）		85.6	79.1	73.7	76.8
志望の専攻分野	44.8	43.6	58.5	58.5	62.1
能力・学力に合致	42.4	40.7	49.0	49.6	50.4
弘前大学は第一志望 (%)					
はい		51.2	53.6	52.7	52.6
いいえ		48.5	45.8	46.6	47.4

IV 学生生活実態調査について

教養部の廃止以降、教育改革・教育の質の向上は大学にとって大きな課題であり、弘前大学でも力を入れて取り組んできました。これらの成果はアンケート結果にも見る事ができます。出席率は第3回までとそれ以降では設問形式が異なりますが、第4回以降については、ほとんど・すべて出席、の割合が90%以上に達しています。欠席の理由として、授業がつまらない、勉強の意欲がわかない、などの割合も低下しています。逆に授業に対する満足度は上昇しています。ただ、あまり・まったく満足ではない、の割合は減少しているとはいえまだ15%ある事も事実です。不満のおもな理由は、興味・関心がもてない、選択・単位取得などの制限、受講したい科目が少ない、などです。また、難しくついていけない、の割合は上昇傾向であり引き続き授業の改善に努めていく必要があります。また、学力低下の一因と思われる1日の学習時間（授業以外）ですが、30分以下、という回答が依然として30%以上もありますが、調査ごとに学習時間が徐々に長くなる傾向があります。30分以下の人は最低でも1時間以上になるように頑張ってください。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
授業への出席状況 (%)					
すべて出席			30.3	40.4	39.4
ほとんど出席			59.7	53.6	55.6
半分くらい出席している			5.6	2.4	2.7
ほとんど出席していない			2.8	1.8	1.2
まったく出席していない			1.1	1.4	1.1
欠席理由 (%)					
授業がつまらない	46.4	42.4	19.0	8.8	9.2
勉強の意欲がわかない	25.0	25.5	11.8	5.6	6.4
授業についての満足度 (%)					
非常に満足している	1.4		6.1	7.6	10
まあまあ満足している	37.8		61.8	69.5	75.1
あまり満足していない	51.1		28.5	18.2	12.1
まったく満足していない	9.6		1.9	3.2	2.7
授業で難しくついていけないものがあるか (%)					
ない		61.8	41.1	39.6	38.8
ある		36.4	57.1	58.6	61.2
授業以外の学習・研究時間 (1日何時間?)					
3時間以上	10.6	4.0	7.3	6.2	6.4
2時間～3時間未満	12.8	5.6	8.7	10.9	13.1
1時間～2時間未満	22.0	14.4	26.8	22.3	27.2
30分～1時間未満	21.7	19.7	19.8	18.8	20.6
30分未満	32.6	55.7	36.9	41.5	32.6

弘大生の経済状況について見る場合、少し注意が必要です。親の年収や自身の1ヶ月の生活費(収入と支出)といった経済状況を直接反映する質問については、質問形式の変更、答えづらい・答えたくない(または分からない)、などといった理由からこれらの結果はやや信頼性に欠ける状況です。そのような中で、奨学金や授業料免除に関連する設問は比較的安定した結果になっています。奨学金を受けている人の割合は調査ごとに増加しています。授業料免除についても同様に増える傾向にあります。授業や生活費についての財源は実家・親が依然として大きいのですが、その割合や金額も減少する傾向にあり、それを補うために奨学金を使う傾向が見られます。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
奨学金や授業料免除の受給について (%)					
奨学金を受けている	29.2	30.4	42.6	51.8	57.5
授業料免除を受けている	8.0	10.4	6.3	10.4	11.5
授業料のおもな出所は？ (%)					
親			78.3	75.3	75.4
奨学金			11.3	17.8	21.1

卒業後の進路については、第3回以前と質問形式が変わりましたが、まとめると大学院などの志望の割合は横ばい、就職志望の割合は増加しています。志望の就職先は、民間企業、公務員等、専門職（医療や法律などの関係）の割合が高くなっています。調査ごとの推移は変動が大きいです、いずれも横ばいから増加の傾向が見られます。就職難や安定志向の表れと思われそうですが、教育職については減少しています。教員採用数は東京などの一部を除き依然として低い事や教員免許に関連した事などが影響しているものと思われます。ところで、平成16年に設置した学生就職支援センターの利用率は24%（回答者全体の）とそれなりの利用率ですが、存在を知らない、という回答も10%あります。

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
あなたは卒業後の進路について (%)					
就職			73.2	77.1	81.2
大学院など	18.4	27.0	4.4	4.4	5.4
欠席理由 (%)					
授業がつまらない	46.4	42.4	19.0	8.8	9.2
勉強の意欲がわからない	25.0	25.5	11.8	5.6	6.4
希望職業は？ (%)					
民間企業	18.0	24.0	14.4	23.8	27.5
公務員・公的機関	23.5	33	24.5	19.2	25.8
教育職	25.8	20.2	21.6	17.0	17.0
専門職	13.8	10.6	24.3	26.7	20.0

さて最後になりますが、上記でもふれたように本学の調査と同様の調査として全国大学生協同組合連合会(全国大学生協連)のアンケート調査(学生生活実態調査)があります。「学生の生活水準が30年前に逆戻り」といった報道が話題になり、記憶されている方も多いと思います。この2つの調査(弘大と全国大学生協連)は共に学生生活実態調査という事で共通する点がありますが、実施している組織の違いから対象、方法、重点の置き方などが多くの点で違いがみられます。例えば、対象は弘大生と全国の大学生(ミクロとマクロ)、方法は4年毎の全数調査と毎年のサンプリング調査、重点は授業や施設環境と経済的活動、などといった具合です。このようにお互いが相補的な位置づけとなっており、全国大学生協連の結果についてもご覧いただければと思います。

全国大学生協連の調査結果の概要は以下のURLから閲覧できます(報告書は1万円販売)。

<http://www.univcoop.or.jp/press/index.html>



日本に留学して

教育学研究科 2年 賀子笑 (が し え み)

私は、たといつか後悔しても、やりたいことにチャレンジしてみようと決めて、日本にやって来ました。現在は弘前大学の修士2年生としてデザインに関する研究をしています。

「夢は見るもんじゃない、叶えるものだ！」

これは、ある日本のドラマの中で聞いたセリフです。本当にいい言葉だと思いました。過去2年間の日々を振り返ると、自分の夢が一つずつかなえられているのではと、はっと気づきました。それは日本に来て、見たことがない世界で、見たことがない自分を発見できたことです。



弘前大学 男女共同参画推進室
「つがるネッサンス! 地域でつなぐ女性人才」のロゴマークとポスター
公募で最優秀作品賞

4月の雪と5月の桜は私の留学生活の最初のキーワードになりました。日本に到着した直後、東京から新幹線で北へ行けば行くほど、窓の外の風景はだんだん変わってきて、雪がたくさん積もっている景色にとっても驚きました。中国の南の出身で、雪を一回しか見たことない私は、今思い出しても、弘前の雪は本当に不思議でした。

日本に来る前は、留学生活について甘いものばかり想像して、とてもワクワクでしたが、大変だった時もありました。生活でも学校でも、楽しい経験も辛い経験も、いっぱい経験して少しずつ慣れてきました。諦めようとするほどではありませんでしたが、最初はやはり分からないことだらけで、いろいろとショックを受けました。日本語力が足りないことより、専門知識とスキルが足りないことで、さんざん迷ってしまいました。

中国での大学は、工学部を卒業しました。同級生の皆の多くは、メーカーの企業の技術職で働いています。その時の私は、「本当にやりたいことって何なんだろう」と、ひたすら考えていました。しかし、結局はその答えがなかなか見つからなくて、適当に就職することだけはしたくないのでした。小さい頃から好奇心が強く、新しい面白いものが好きでした。テレビやネットでよく出ている「ジャパニーズデザイン」は何回も私の心を動かしました。そしてデザインに関する研究を志しました。以前も時々、趣味でソフトウェアを使って、自分の発想を形にできるように、いろいろとチャレンジしていましたが、プロの覚悟を持って本気で挑んでみると、かなり難しいことがわかりました。デザインは面白いといっても、遊びではありません。自己表現というよりも「コミュニケーション」



弘南バス「津軽号」の車体デザイン
公募で最優秀作品賞 (2011年4月から運行開始)

なのです。それを認識できなかった自分は、わけの分からないものもたくさん作ってしまいました。しかし、先生の励ましで頑張り続けて、いろんなコンペに参加するチャンスも頂きました。その結果、採用していただいた作品も何点かでき、制作者として認められた喜びを感じることができました。先生と友達のアドバイスを聞きながら考えて、失敗して、挑戦して、また失敗して、再挑戦して、こうやって過ごしてきた日々は、全て私の宝になりました。プロまではまだ遠いですが、私は確かに成長できました。そしてこれからもきっと成長していけると思います。



弘前大学での留学生活

保健学研究科 博士後期課程1年

柴 宏博 (さい こうはく)

中国から来日3年目の2005年4月に、東京にある日本語学校を卒業し、本来の留学目的を達成するために、東京の先生及び友人と離れて、自分にとって全く新天地であった弘前に来ました。そして、当時希望した弘前大学に入学できて、不安と夢を抱えながら専門性が強い放射線技術科学の勉強を始めました。

4年間の学部生活と2年間の修士生活は充実した勉強生活のうちに終止符を打ちました。今でも目を閉じて遡るとその頃の出来事がまだくっきり鮮明に浮かんで来て、真に昨日あったばかりのようです。全く光陰矢の如しという実感です。この間に私は外国人留学生としてたくさんの体験もできました。日本語でのプレゼンテーション、初めての国家試験と診療放射線技師免許取得、初めての研究活動と論文投稿等々がありました。弘前大学で過ごしたこの6年間は私にとって将来の土台を築く充実した期間ですし、人生の方向を導いてきた重要な時間でした。当然、これらのはすべては順風満帆ではありませんでした。言葉の問題で、先生の授業を聞き取れなかったり、日本人のクラスメートとコミュニケーションが取れなかったりしました。文化の違いによって、周りに変に思われたり、友達ができなかったりということもありました。しかし、それらの悩みと苦しみを踏み越えた度に、自分の自信になり、成長になり、前に進み続ける勇気にもなりました。異国にいるうちに、改めて全てのことに対して認識と勉強しなければならないと思いました。

今は弘前大学保健学研究科博士後期課程に所属し、日々実験及び論文閲覧の研究生活を送っています。私の研究活動は学部の卒業研究で現在の指導教員と出会ってから始まりました。研究の大変さを味わいながら3年間を経過しましたが、まだ初心者であることを常に感じています。自分の感想では、研究は一つの分野に絞って、非常に狭い知識範囲の中で行っているとよく言われますが、実際にはその一つの分野だけに含まれる基礎知識さえ膨大な量になるので、他分野と関わる場合に、さらに数倍の関連学習も欠かせないのが普通です。その上に、精密な実験計画に沿って真剣な実験を加えることによって、一つの納得できる研究が初めて生まれます。研究は脳力と体力が消耗され、苦しい作業ですが、その代わりにヒント、アイデアが浮かんできた瞬間と一歩一歩明瞭な結果に近づいた時の喜びと収穫に慰められます。自分の努力によって新たな真実が解明されたからです。

弘前大学での留学体験は私の人生の里程標と誇りだと思えます。中国の風習文化では、感謝する気持ちを何よりも重視しているため、指導してくれた先生及び先輩の方々にいつも心の中で「ありがとう」と言い続けています。弘前大学でもらった厚い恩恵に報いるために、これからも最善の努力と最優秀の成績を目標として頑張りを続けて行こうと決心しています。



立佞武多



56th Annual Meeting Radiation Research
September, 2010, Maui, Hawaii

北日本新エネルギー研究所

North Japan Research Institute for Sustainable Energy (NJRISE)

2010年10月1日に「北日本新エネルギー研究センター」が「北日本新エネルギー研究所」に昇格してから、1年以上が経過しました。再生可能エネルギーに恵まれ熱需要の多い北日本の地域の特性を生かした低炭素型エネルギーシステムの開発と、世界に通用するエネルギー技術の研究を目指していますが、東日本大震災の後、当所の役割はますます重要になりました。

大震災と津波、それによって起こった福島第一原発のいまだに収束しない事故で明らかになったのは、世界の中で最も信頼性が高いと思われていたわが国のエネルギーシステムがいかに脆弱だったかということです。現在は省エネと火力発電の増強で急場をしのいでいますが、中・長期的には災害にも強く低炭素型のエネルギーシステムの構築が求められます。再生可能エネルギーや分散型エネルギーの研究開発と普及を加速する必要があることは言うまでもありません。当研究所では、研究開発を加速するとともに、産学連携と社会との連携をさらに強めるとともに、将来に備えてエネルギー技術人材の育成に力を入れて行くことにしています。

この1年の研究開発のトピックスと社会との連携、人材育成のための活動について紹介します。

研究のトピックス

(1)燃料電池およびバイオマス

バイオマスなどの自然エネルギーと燃料電池を組み合わせる新しい技術は、エネルギーベストミックスに資するのみではなく、特に積雪寒冷地における地産地消型グリーン・イノベーションなどにも資する重要課題です。ここでは産学官連携の推進を図るとともに基礎研究から実用化まで一貫した研究開発を展開しています。



12V固体高分子形燃料電池スタック
(弘大GOGOファンド産学官連携開発)

(2)寒冷地用EV

当グループでは、バイオガス補助エンジンシステム、ステア・バイ・ワイヤ(SBW)システムや高性能モータの回生システムの検討を他大学と協同で行っており、さらに今後、民間の電機・自動車整備会社の協



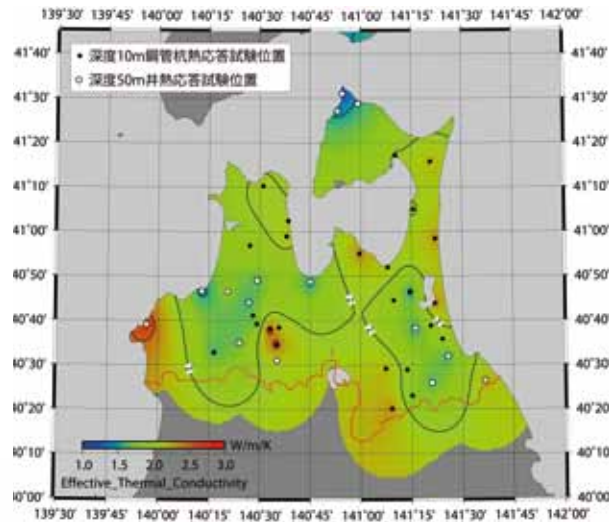
力を得て、コンバートEVシステムに関する検証実験を開始する予定です。また、研究体制の一層の強化を図り、かつ、積雪寒冷地でのEV普及・利用促進に向けた活動として、7月に寒冷地EV研究会を発足させました。

開発中のSBWシステムを調整する島田教授

(3)新エネルギー利用技術：地熱・地中熱の熱利用

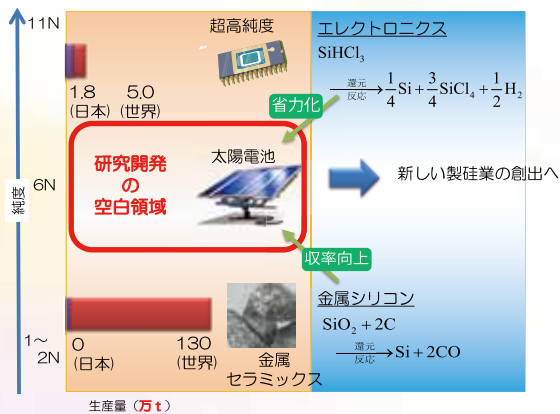
本研究所が現在関連している地熱・地中熱の研究プロジェクトが現在3つ進行しています。「温泉共生型地熱貯留層管理システム実証研究」と「温泉発電システムの開発と実証」、そして「地中熱利用普及拡大事業（図）」です。本研究所では、高温域から低温域まで含んだ地熱の研究開発及びその利用の実現に向けて研究を進めています。

図 青森県における地中熱利用に必要な地盤の有効熱伝導率の分布図



(4)低コストシリカ還元法の開発

大規模な太陽電池の導入には欠かせないシリコン原料の、低コストプロセスの研究を行っています。シリコンは、LSIやトランジスタに欠かせない工業材料ですが、現在、超高純度シリコンを少量しか作られていません。高純度のシリカから冶金的に還元することによって低コストプロセスの開発を目指しています。



太陽電池にフォーカスした新‘製硅’業の研究領域

VI 施設紹介



電力消費の見える化センサーユニット

(5)六ヶ所村における電力利用の効率化を支援する情報通信技術の実証実験

六ヶ所村の300戸の家庭で電力利用の効率化を支援する情報通信技術の実証実験を行い、構成した通信ネットワークおよび作成した需要予測シミュレーションが必要性能を持つこと、ならびに電力消費の見える化による環境負荷低減効果（約7%）を検証しました（総務省および青森県予算により実施）。

新エネルギーフォーラムの開催

これまで産学官関係者を招き隔月で開催していた「新エネルギープロジェクト企画検討委員会」を新エネルギー研究所主催の、よりオープンな講演会として開催することとし、名称を「新エネルギーフォーラム」としました。これまでに3回のフォーラムを開催しています（第1回「NJRISE地熱分野一年間の総括」、第2回「NJRISEバイオマス・燃料電池分野一年間の総括」、第3回「青森でも太陽光発電を」）。第1回及び第2回は、それぞれ地中熱・地熱及び燃料電池・バイオマスに関するNJRISEでの平成22年度の取り組みと成果について報告しました。第



第3回新エネルギーフォーラムの様子

3回は青森県エネルギー総合対策局エネルギー開発振興課との共催として、一部「太陽光発電施工技術者講習会」と合同で開催しました。太陽光発電への関心の高さを反映し約100名の参加者がありました。第4回は「青森が必要とする次世代自動車の開発に向けて」と題し、研究者らによる個々の技術開発の報告や、産官による現状分析や短～長期的ビジョンについての講演を計画しています。

総合文化祭への出展

「新しいエネルギーで青森の未来を快適に」と題して、10月22日に開催された第11回弘前大学総合文化祭に参加しました。当研究所は、地熱、バイオマス・水素・燃料電池、太陽光、風力や寒冷地電気自動車開発に関する取り組みの紹介、ならびにエネルギーシステム簡易体験コーナーを出展しました。当日は、研究者のみならず、広く一般の方々に多数ご来場いただきました。その際、多くの質問が寄せられ、昨今のエネルギー諸問題に対する関心の高さを肌で感じるとともに、我々の責務を再認識した次第です。



総合文化祭エネルギーシステム体験コーナー

EV研究会の発足

寒冷地用電気自動車（EV）開発グループでは、7月15日に青森発の“寒冷地EV研究会”を発足し、同日、北日本新エネルギー研究所を会場に第1回寒冷地用次世代EVシステム・開発研究会講演会を開催しました。講演会には北海道、青森、岩手、宮城や山形といった積雪・寒冷地域を拠点としてEV普及の現場に身を置く産学官の方々にご参集いただき、地域での活動紹介や諸方面の技術開発報告を通じて活発な議論が交わされました。



寒冷地EV研究会の講演風景

21世紀教育「環境と資源(F)－総合エネルギー学」の開講

3.11 東日本大震災は我が国のエネルギー需給構造の脆弱性とエネルギーパラダイム転換の必要性を悲惨な形で示し、凶らずも東日本大震災直前に本学が設立した北日本新エネルギー研究所の先見性を証明してしまいました。就職超氷河期と呼ばれる今日の困難な時代にあっても、新エネルギー分野の前途は薔薇色です。そう、いまは危機からチャンスを創出する時代なのです。21世紀教育「環境と資源(F)－総合エネルギー学」はこの北日本新エネルギー研究所の教員スタッフ一同が渾身の情熱を込めて本学の新入生に贈る、珠玉のエネルギー未来像です。たとえ途中からでも、扉は常に諸君に向かって開かれています。

教育学部附属小学校パティオ

教育学部附属小学校 副校長 安藤智史

平成19年10月に本校は、校舎と体育館を改修しました。それと時を同じくして、創立130周年記念式典や関連事業を行いました。その際に話題になっていたのが、校舎と体育館をつなぐ渡り廊下横の100坪弱の空き地でした。「もったいない土地・空間」とか「整備しただけでは活用できるのでは？」などの声はありましたが、130周年記念諸事業への対応もあり具体的には進展しませんでした。

しかし、平成20年度に新しく校長として赴任した教育学部教授蝦名敦子先生（美術科教育）が、この課題解決に取り組みました。それは、この土地・空間をパティオ（スペイン語で中庭の意味）にするということでした。本校には広いグラウンドとともにそれに通じる部分を芝生化したこともあり、屋外での『動』の部分があります。しかしながら、『静』の部分がありません。語り合ったり、読書をしたり、心落ち着かせるところが屋外にあってもいいのではないかという発想です。また、アートな空間も学校には必要という考えもありました。この2つの考えをマッチングさせてのパティオ造成の企画が始まりました。蝦名校長赴任2年後のことです。ただ、難題続出です。デザインは？

設計は？ 資金は？ 職員や後援会・保護者の理解は得られるか？ 等々。課題解決には乗り越えなければならない高いハードルがいくつも待ち構えていました。

しかし、鋭意専心。時には〈当たってください〉の精神で進みました。弘前大学教育学部美術講座と保護者及びOBとの連携なくしては実現不可能でした。また、事務方の存在も忘れてはなりません。お知恵も拝借しました。さらには、運にも恵まれたこともありました。紙面の関係上、詳細は割愛しますが、本校を愛し、支えていただいている多くの皆様方のご支援ご協力によって完成することができました。資金についても、創立130周年協賛として出資いただいた趣旨を生かしたものと考えております。

本校後期が始まった10月18日に始業式に引き続き、体育館で遠藤学長、昆教育学部長をはじめパティオ整備委員や工事請負会社代表者のご臨席をいただき、児童全員が参加しての開園セレモニーを行いました。式後は、児童・教職員全員が中ブックでパティオに入り、多機能性を秘めたデザインとその作りに目を輝かせていました。ただ、パティオは全てコンクリート製ということもあり、中では絶対に走り回ったり飛び跳ねたりしないということが約束として決められています。ケガ防止の面からも《静》の場所です。

今後、アートな空間をもったこのパティオは、学年集会や読書活動、写生等々に使われます。お弁当を食べるときにも使えます。デザイン的にも優れたもので、子どもたちの憩いの場となります。このような庭を設けているのは、日本ではおそらく本校だけだと思います。本校においての際には是非パティオにお立ち寄りになり、ご覧いただければと思います。いつでも歓迎いたします。

結びに、創立130周年記念事業に協賛いただきました皆様方への重ねてのお礼を申し上げ、パティオ完成のご挨拶といたします。



Ⅶ 新任教員自己紹介



教育学部 国語教育講座 講師 仁平 政人

2011年10月より、近代文学担当として着任いたしました仁平政人と申します。
主な研究対象は川端康成をはじめとした昭和初期の文学ですが、他にも明治から現代に至る多様な文学作品、さらには映画・マンガなど幅広い文化の問題に関心を抱いています。人にとってフィクションや物語がどのような意味・力を持ちうるのか、学生の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

保健学研究科 健康支援科学領域 講師 川添 郁夫

この10月に保健学研究科に着任しました川添郁夫です。
専門は精神看護学で、27年間精神科病院で精神障がい者への看護実践や精神障がい者をもつ家族への支援などを行ってきました。
弘前には人々の絆や温かい人情があり、弘前大学で教育研究活動に従事できる喜びを感じております。皆さんのご期待の沿えるよう精励してまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。



農学生命科学部 分子生命科学科 准教授 坂元 君年

9月から農学生命科学部に着任しました。生物のエネルギーを作るシステムについて、主にミトコンドリアで働く酵素の研究を行っています。ミトコンドリア機能のほとんどは多くの生物で共通ですが、例外もあります。そういった変わり者の生物を相手に研究を進めていると、これまで自分が避けていた分野の知識、技術が必要になってきます。「知らないよりは知っているの方が楽しいに決まっている」と新しいことに挑戦を続けています。

Ⅷ けいじぼんコーナー

教育学部附属国際音楽センター主催チャリティーコンサートを開催

去る9月28日（水）、教育学部附属国際音楽センター主催による東日本大震災で被災した弘前大学生のための支援チャリティーコンサートが、創立50周年記念会館みちのくホールにて開催されました。

このコンサートは、演奏会により集められた義援金を本学奨学金制度に寄付させて頂き、被災学生の支援に少しでも役立てたいという趣旨で企画されました。

当日は、遠藤学長先生をはじめ、内外の音楽愛好者や学生等、沢山の方々がお見えになり盛会のうちに終了することができました。集められた募金額の合計は¥49,540と予想を超えた金額となりました。国際音楽センター教員一同、そして出演した学生やOBのメンバー共々、深く感謝している次第です。

我々音楽関係者が、被災された方々に出来る事など僅かで微々たるものですが、ほんの少しの気持ちでもその方々に寄り添うことができたならとの一心で演奏いたしました。当夜、会場にお越しの皆様と我々出演者全員の気持ちが被災地、そして被災した弘前大学生らに伝えられることを只管祈りたいと思ひます。

教育学部附属国際音楽センター 教員一同



Ⅷ けいじぼんコーナー

学長と新入生の保護者との懇談会を開催

本学では、学生の保護者への情報提供、連携体制の強化を図ることを目的として、毎年学長と新入生の保護者との懇談会を開催しています。

平成23年度は6月11日から7月9日までの期間で、学長が5地区（弘前、八戸、札幌、仙台、東京）の会場へ出向き、弘前大学の現状、教育体制、就職支援体制及びクラス担任制度・相談コーナー等学生への諸支援体制などについて説明し、5会場で合計227名の保護者の出席がありました。



弘前大学教育に関する表彰式を実施

弘前大学では、前年度において優秀な成績を修めた学生及び教育に関して優れた業績を上げた教員を対象として、8月1日（月）に事務局大会議室で表彰式を実施しました。

今回の受賞者は、各学部等から推薦された教員6名、学生26名で、表彰式には、神田教育・学生担当理事及び各学部長・研究科長も出席し、遠藤学長から一人ひとりに表彰状と副賞が贈呈されました。

これを受けて、学生を代表して医学部医学科2年の柴崎貴俊さんから、教員を代表して理工学研究科の竹ヶ原克彦教授から謝辞が述べられ、表彰式は和やかなうちに終了しました。



遠藤学長（前列右から6人目）と表彰学生



遠藤学長（前列右から4人目）と表彰教員

Ⅸ 編集後記

東日本大震災の日、私は研究室で翌日に控えた入学試験の準備をしていました。その棟は、解体前の古い建物でしたので、新しくできた校舎へ大急ぎで同僚教員達と一緒に走って移動しました。「2011年（平成23年）3月11日14時46分に何処で何をしていた」ということは、皆さんが一生忘れない出来事となったと思いますし、これからも若い人々に語り続けていくことになるでしょう。

本号の特集は「東日本大震災に対する支援活動について」です。弘前大学、被ばく医療総合研究所、学生ボランティアの各取り組みについて、力のこもった記事をお届けすることができました。これらを読むと、我々がやらなくてはならないこと、これから出来ることがまだ沢山あることに気づかされます。東日本大震災後に世界諸国から、日本各地からの支援活動がニュースとなっていますが、東北に存在する我々弘前大学が、被災地と被災者の方々にどのような貢献ができたのかという事実は、歴史としてこれから記されていくこととなります。これらの取り組みが弘前大学を輝かせ、10年後、100年後の後輩達に残せる財産となしてほしいと思います。（M.S）

▶▶▶ 2011年
弘大生の病気・事故等による
給付補償金は

2,141万円でした。

2011年は310名の弘前大学生が病気や事故、盗難などのアクシデントに見舞われ、加入している共済あるいは保険から補償されています。

その内容を、大学生協の学生総合共済(以下生協共済)と学生教育研究災害傷害保険(以下学研災)の給付実績をもとにまとめました。

※学研災は生協が大学より業務委託を受けて事務を代行しています

[2010年11月~2011年10月の給付件数と給付金額]

項目	生協共済		学研災		合計	
	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額	給付件数	給付金額
病気入院・手術	79人	951万円	0人	0万円	79人	951万円
事故入院・手術	48人	412万円	3人	27万円	51人	439万円
事故通院・固定具	136人	431万円	0人	0万円	136人	431万円
本人死亡	0人	0万円	0人	0万円	0人	0万円
盗難・借家人等賠償	25人	130万円	0人	0万円	25人	130万円
扶養者死亡・見舞金	19人	190万円	0人	0万円	19人	190万円
合計	307人	2,114万円	3人	27万円	310人	2,141万円

特徴①

日常生活では、自転車運転中の事故が多くなっています。

通学中の車との接触事故が多く報告されています。通いながっている道でも、あらゆる状況を想定し、注意して走行することが大切です。

特徴②

病気では消化器系、呼吸器系の給付が多くなっています。

季節の変わり目、試験期間など生活の変化が大きいつきに給付が多くなる傾向があります。精神疾患による入院が増えているのも特徴です。生協共済で給付されます。

特徴③

水道管凍結破裂による水漏れ事故が報告されています。

100万を超える被害もありました。長期休暇など家を長くあける時は必ず「水抜き」をしましょう。ちょっとした注意で被害が防げます。

Q 入院費用はどのくらいかかる？

たとえば大学生が病気で入院したら、どのくらいの入院費用が必要になると思いますか？

- 平均入院日数 **17.5日**
- 治療費用の平均 **143,874円**
- 雑費(交通費等) **32,072円**

治療にかかった費用と雑費の費用合計を、入院日数で割ると1日あたりの入院費用は約1万円となっています。

生協共済は、2009年に保障制度が改善され、入院1日あたりの保障日額が1万円と、大学生の実態により合った保障内容となりました。

●給付の申請手続きは生協店舗で簡単にできます。

(文京地区) SHAREA たび Shop tel0172-37-6480

(本町地区) 生協医学店 FERIO tel0172-35-3275

お気軽にお申し出、お問い合わせ下さい。



●食堂入口に設置されている給付ボードで、毎月の特徴的な病・事故や給付内容を掲示し、予防の呼びかけもしています。



島 善郷先生頭彰碑



生体部分肝移植世界最長生存犬の像



加藤謙一の石碑

弘 前 大 学 VOL. 172

学園だより

2011年12月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。

e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学学務部学生課



HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人 弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長 一戸とも子（教育・学生委員会）

委 員 平野 潔（人文学部）

佐藤 光輝（教育学部）

松谷 秀哉（医学研究科）

阿部由紀子（保健学研究科）

任 皓駿（理工学研究科）

大町 鉄雄（農学生命科学部）

佐々木宣子（学生課）

小山内英子（学生課）

印刷：青森コロニー印刷